読売歌壇

小池　光　選

里芋の葉よりころがり落つる露水銀のごとき光を放つ　野田市　青木　作郎

【評】水銀のような露の玉。この比喩がすべての歌で、とてもよい。里芋の大きな葉にたまる露のしずく。きらきらころがり回ってふしぎな物体のよう。簡素で鮮明な自然詠。

九時間の大手術終え退院し妻の育てしトマトを食す　館林市　中山　隆二

【評】大手術を終えて退院、生還した。菜園で妻が育てたトマトを食べる。実においしい。生きていることはすばらしい。夫婦の愛情がしみじみ感じられる。

妹が産まれて姉はそろーりと生後二日の頭をなでる　つくば市　岩瀬　悦子

【評】いくつのお姉ちゃんだろう。家に妹がやってきた。生後二日の妹の頭をこわごわ撫でる。きょうだいっていいものだ。

大空にほのかに赤いおおとりの羽を広げて夕焼けの雲　高岡市　田中　芳子

車買ひ換へるならこれと言つてゐた車種を見るたび亡き夫を思ふ　さいたま市　大塚　数子

長男を亡くせし祖父は医師を辞め誰とも語らぬ日を過ごしけり　調布市　川久保洋子

沈む日にビルの林の輝くをこの世ならざるものと眺むる　久喜市　深沢ふさ江

大会に遅れるといい矢のように走ってゆきぬ弓道部の男子　土浦市　大竹　淳子

田水沸くほどの暑さに園児らの朝のお散歩今日もお休み　福井市　高橋外茂子

コミュニティーバスは着きたり駅前にこまめに止まり大回りして　瑞穂市　渡部　芳郎

栗木　京子　選

原爆が落とされなかった福島に今は原発廃炉のデブリ　郡山市　寺田　秀雄

【評】原爆を投下された広島と長崎の苦しみが消えることはない。それと同時に、東日本大震災による原発事故に遭遇した福島の痛みを忘れてはならない。燃料デブリが炉内にまだ残る現実が、言葉の背後から重く迫る。

夕星をフロントガラス越しに見る時間指定の荷の配達に　所沢市　若山　巌

【評】時間帯を指定して荷物の配達を依頼することが増えた。運ぶ方々にとっては時間との競争であろう。上句に実感がにじむ。

ふたりかと思いしが三姉妹という入れ替わりして草引く媼　会津若松市　真壁みどり

【評】高齢の三姉妹。同居しているのか、あるいは順番に実家の掃除に訪れているのか。童話の世界のような情景が目に浮かぶ。

お神酒まで傷む熱暑の日が続く仏花も遂に造花となりぬ　横浜市　山本喜太郎

突然に盆踊りの輪に入りし妻他の踊り手と振りが合ってる　白井市　野老　功

旅の地のスーパーで買うコーヒーの味を占う明日は帰国日　神奈川県　大多和けい子

バイエルを確かめながら弾くようにならんで歩く夕映えの道　高島市　くらたか湖春

四十代からなれるものってなんだろう窓の向こうに消えかけの虹　佐野市　みくに

たどたどしき文と文字とで届きたる孫の絵葉書ミャクミャク柄で　鎌ヶ谷市　藤本　嗣子

日めくりの立秋のあさ線香をラベンダーから金木犀の香に　龍ヶ崎市　日野林佐智子

俳　万智　選

返信は来るがぼくへの質問はなくて窓から月を見ている　上尾市　関根　裕治

【評】淡く失恋を自覚した歌。相手から僕へ、聞きたいことは特にないらしい。知りたいと思うのが恋だとしたら、残念ながら脈なしだ。こちらから月は、はっきり見えるのに、月の視界に僕はいないのである。

庭先より上がり込むごと月曜は文芸面より開く新聞　横浜市　山田　知明

【評】普段は一面という正面玄関から新聞を読む。けれど歌壇俳壇のある月曜は別だ。庭先というユニークな表現に親しみがこもる。

甘くない苺をジャムにするようにきみに会えない時間をつぶす　富士見市　松本　尚樹

【評】会えるなら、すぐにでも会いたい。甘い苺をそのまま食べるように。「つぶす」が苺と時間の両方に掛かるのが表現の工夫だ。

乾反り葉を踏めば秋めく音のしてデリバリーピザのバイク過ぎゆく　市原市　井原　茂明

とりどりの浴衣の客を乗せている京葉線は定刻に着く　千葉市　佐藤　綾子

車いす斜めに寄せて磨いてるシンクの角を一人で四つ　札幌市　橘　晃弘

プーさんに顔をうずめて院生の摂取しているヌイグルミウム　豊中市　葉村　直

天井から降りて来ないのでヤモリとの共同生活始まりました　相模原市　榎本　ハナ

あたりまえの生活でいい部屋干しのシャツをくるりと裏返す朝　大和郡山市　四方　護

息を詰め流しでしゃぶる桃の種おかあさんにもひみつはあるよ　朝霞市　桐島　あお

黒瀬　珂瀾　選

ひと部屋へあれもこれもと持ち込んで夏眠動物に成り切るわたし　岩国市　須山佳代子

【評】これほどの猛暑では、冷房を効かせた部屋で静かに休んでいるのが一番ですね。冬眠ならぬ「夏眠」で、この夏を乗り切る作者。私も夏眠動物になってしまいそう……。

玄関に捕虫網立て掛けたまま大の字に寝る兄と弟　横浜市　矢沢　寿美

【評】一方、猛暑でも子供は元気。朝から虫取りに出かけ、疲れて帰ってきたら早速お昼寝。寝相もやんちゃな、夏の兄弟です。

我が八十路に欲しい物はと問う吾子ヘルソンに果てし父の骨片と　市原市　桜井　登代

【評】フィリピン・ルソン島で戦死した父。戦後八十年の今年に八十歳になられたということは、作者は生前のお父上には会えなかったのかも。遺骨も戻らない父への深い思い。

猛暑日を逃れて入る地下茶房モカの香りに暫しまどろむ　東京都　尾崎　永治

他動詞のやうに生き来し八十年か亡夫の愛でし古代蓮咲く　神奈川県　鈴木　栄子

うたた寝の妻へ団扇の風送るだんだん年取り愛おしくなる　田川市　原田祥二郎

夏来れば畳外しし座敷より桑を食む音ふとよみがへる　前橋市　近藤　周雄

抑留を解かれ国土を踏みし日を終戦の日とぞ父は語りし　近江八幡市　安田　悦子

観客でいられる声を縫い取って躍るブルーインパルスは戦闘機　射水市　玄　兎

早苗田にしぶき上げつつ乱射せるグラマン飛びゆく遠き日忘れず　小美玉市　松山　光

◇投稿規定◇　はがき1枚に未発表の1作品。住所、氏名(ふりがな)、電話番号を明記。◇他の媒体、選者への二重投稿は厳禁です。選者が添削することもあります。〒103・8601、にほんばし蔵前郵便局留、読売歌(俳)壇、○○先生(希望選者名)係または読売新聞オンラインから　◇毎週月曜日に掲載　右の影絵はおわらかぜのぼん